



Title	「殺狗勸夫」物語の研究 : 中国戯曲における犬文化から [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	呉, 秀娟
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第15068号
Issue Date	2022-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/85474
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Xiujuan_Wu_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 呉 秀娟

学位論文題名

「殺狗勸夫」物語の研究——中国戯曲における犬文化から

・本論文の観点と方法

本論文は、中国の犬文化研究という視野のもとで、筆者が「殺狗勸夫」すなわち「犬を殺して夫をいさめる」物語と総称する二つの戯曲（演劇）を分析したものである。二つの戯曲とは、元代の雑劇『殺狗勸夫』、および元末明初の南戯『殺狗記』を指す。これら「殺狗勸夫」物語は、妻が夫を諫めるべく、手に入れた犬を殺し、これに服を着せて人であるかのように偽装して、夫を諫めるというストーリーである。

これらの戯曲を、犬文化という観点から論じた先行研究はほとんど無く、特に、「なぜ犬なのか」という疑問に言及したものは、きわめて少ない。筆者は、殺された動物が犬であったことには必然性があるとする立場に立ち、中国古来の犬文化に関わる文献を渉猟し、分析、考察を進めることによって、「殺狗勸夫」物語において犬が選ばれた理由について、いくつかの可能性を提示している。

・本論文の内容

本論文は、「はじめに」と「おわりに」、および六つの章から構成されている。

「はじめに」では、犬文化に関する先行研究について概括的に紹介し、本論文の問題意識と構成について説明する。

第一章「「殺狗勸夫」物語の版本について」では、筆者が「殺狗勸夫」物語と呼ぶ二つの戯曲、すなわち、元代の雑劇『殺狗勸夫』、と元末明初の南戯『殺狗記』について、それらの版本を説明したうえで、それぞれのあらすじを、両者の差異を明らかにしながら紹介し、特に研究の多い南戯に関する先行研究を説明する。呉氏が問題とする「殺されたのは、なぜ犬なのか」という疑問に対して、それなりの理由を提示している先行研究は、王政氏の論文ひとつしかないことを言う。

第二章「南戯『殺狗記』がかかえる諸問題をめぐって」では、南戯『殺狗記』の作者と成立時期をめぐってはいまだ定説が無いことを指摘し、この問題がどのように論じられてきたのかについて、この作品に対する歴代の評論を紹介する。元雑劇『殺狗勸夫』については、情報が比較的豊富なものに対して、南戯『殺狗記』のほうは、元末明初に広く流行したものの、その成立年代や作者などについては、いまだに定論がないからである。筆者はこれらの問題に対して、特に結論を出そうとはしていないが、戯曲の最も特徴的なプロットであり、タイトルの「殺狗」にもなっている「犬を殺す」という話柄が、元代のかなり早い時期から継承されてきたものであり、度重なる改編を経てもなお残されてきた設定であることを指摘する。

第三章「南戯『殺狗記』における人と犬の関係について」では、「殺狗勸夫」物語に見える「犬を殺す」くだりに注目し、雑劇と南戯の描写の細部を比較しながら、登場人物と犬との関係について、王婆と楊氏および迎春についての考察を行なう。特に、犬の飼い主であり、犬の提供者でもある王婆は、「三姑六婆」と総称される、忌み嫌われる存在でありながらも重要な社会的機能を持つ職掌に属するものであるとともに、明清の小説や戯曲を駆動させる意味でも、きわめて重要な存在であり、『水滸伝』はじめ明清時期の物語に散見するものである。『殺狗記』における王婆の言動を分析することで、彼女は「人は犬にはおよばない」という考えを持っていることを指摘する。また、犬を買

う者である楊氏および迎春については、王婆とは逆に、「犬は人にはおよばない」という考えを持っており、これが儒教的な思想に由来することを指摘する。そして、人間の動物に対する、これらふたつの相反する態度からうかがえる関係性は、その動物が犬ならではのものであると結論づける。

第四章「「殺狗勸夫」物語と先行する話柄との関連について」では、筆者は、「殺狗勸夫」物語において殺される動物が犬であることの必然性を導き出すべく、犬にまつわる中国古来の物語から、犬が人間の衣服をまとう話柄（すなわち「犬服妖」）に注目し、『漢書』『風俗通義』『搜神記』などに見えるエピソードや、盤瓠神話などを材料に考察する。特に『漢書』『五行志』に見える犬服妖の物語との類似性を指摘し、「犬を殺して服を着せる」というモチーフがこれを模したものであるとの可能性を示唆する。

第五章「戯曲における動物役の実現方法」では、「殺狗勸夫」物語が戯曲という舞台芸術であることから、舞台上に犬をはじめとする「動物」が登場することによって期待される効果に注目し、古今の戯曲における動物の役柄の実現方法について、先行研究を補足するかたちで考察する。実際の動物を舞台にあげることは、古代の百戯雑技（サーカス）における動物の演技に由来すると思われるが、演劇においてはきわめてまれであり、仮面、套頭（頭全体をおおうマスク）、着ぐるみ、臉譜（くまどり）、動物の形を模した頭のかぶり物などによって人間が表現することが多かったことを言う。本章は、付論、もしくは今後への課題として設けられている。

第六章「祭祀に用いられた白犬について」では、「殺狗勸夫」物語における犬のイメージの淵源をたどる作業として、中国古代の祭祀において犬が用いられるケースを取り上げて、この物語の成立以前における犬のイメージについて考察する。ここでは祭祀に用いられる犬の色について整理し、「陽畜」「金畜」としての犬について検討を加え、犬もしくは犬の色が、陰陽五行説のもとで、どのように観念的に認識されてきたかを整理している。

「おわりに」では、全体のまとめと今後の課題をまとめている。